教育学部 学校教育教員養成課程 令和４年度「大学入門ゼミ」実施報告書

松下 幸司（教育学部附属教職支援開発センター）

（１）実施の概要

令和4年度の大学入門ゼミは、昨年度から１クラス減らした6クラス編成（１クラスあたり学生数：28名×5クラス＋27名×１クラス）で実施した（6クラス編成とした理由は後述）。教育学部学校教育教員養成課程においては、１～6組の授業教室が前期「大学入門ゼミ」のみならず、後期実施の「教職概論」(学部実地教育科目)までを通して“ホームルーム教室”となるよう、講義室調整を行った。併せて、担任教員の学生指導のクラス間連携を図るとともに、学生にも初年次教育の一体感・一貫性を感じさせるため、ホームルーム教室となる講義室を、中庭を取り囲む4・5号館2階に、クラス番号順に並ぶよう集中配置して実施することとした(１組 421・2組 422・3組 423・4組 526・5組 525・6組 523)。また、7クラス編成ではなく、6クラスの偶数編成とすることで、１・2組、3・4組、5・6組の2クラスを「ペア学級」とし、弾力的な学習活動と学生指導ができるよう工夫した。（なお、指導体制としては、各クラス１名の主担任が主に学生指導を行い、2クラスに１名の副担任が、主担任の指導サポートを行う体制とし、教育学部１年次生全体を9名（＋全体コーディネート１名）の教員が指導を担当することとした。

本学部学校教育教員養成課程における令和4年度前期「大学入門ゼミ」の授業計画については、4月１１日実施の初回授業において、オリエンテーションとして学生に周知を行った。その際、事前に moodle「大学入門ゼミ」コースページに授業計画の pdf ファイルを掲載しておき、moodle へのアクセス方法を周知し、学生一人ひとりがアクセスすることによって、１年次学生全員の moodle 閲覧スキルを確認した。これは、その後の新型コロナウイルス感染症への対応として、授業をオンライン配信しなければならなくなった場合を想定した、１年次生に対する早急な moodle 活用スキルの定着をめざして実施したものである。

なお、授業のオンライン配信を想定し、moodle だけでなく Zoom へのアクセス方法についても、初回授業において周知・指導・確認を行った。昨年度、１年次生全員が415講義室内で一斉にアクセスを行ったため、Zoom へのアクセスができない学生が多数生じた。これをふまえ、本年度は3分の１の学生（5・6組）が上述したホームルーム教室に移動した上で、授業後半に Zoom へのアクセス方法について指導することとした。学生が４１５講義室と別の2講義室に分散して Zoom にアクセスを行い、４１５ 講義室からの Zoom 配信映像・音声を受信できるかどうかを確認する要領で行った。アクセスができるまでに若干時間がかかったり、プレゼンテーション資料の画面共有の配信に遅延・学生間での表示速度のばらつきなどが生じたが、概ね出席者全員が Zoom にアクセスできる状況を整えることができた。

全学共通コンテンツについては、共通コンテンツに関連するミニ演習を円滑に実施・指導できるよう、昨年度より実施体制に工夫を加え、415講義室で一斉授業を行い、2名教員がティーム・ティーチングで指導にあたることとした。１つの共通コンテンツを担当する2名の教員のうち、１名は前年度担当した教員が2年目担当を行い、残る１名は、本年度新たに「大学入門ゼミ」を担当する教員が担当指導を行う体制をとっている。これにより、2年目担当教員が初めて担当する教員に、共通コ

ンテンツの内容や指導方法を伝達・共有（＝伝承）することができる。すなわち、2年目の教員が主担当として全体指導にあたり、本年度初めて「大学入門ゼミ」を担当する教員が副担当として、学生の個別指導などにあたる方法である。一昨年度までは2名の教員が2つの別々の集団を指導する方法で実施していたが、このようなチーム・ティーチングで指導にあたることにより、2名の教員が別々に授業を実施する方法に比べ、1人ひとりの学生へのより細やかな対応・指導が可能となった。併せて、本年度初めて「大学入門ゼミ」を担当する教員が副担当として授業に関わることによって、「授業に参与しながら、共通コンテンツの内容・指導方法を理解する」徒弟的な伝達・共有（＝伝承）が可能になることを期待し実施している。

教育学部「大学入門ゼミ」における全学共通コンテンツについては、附属学校園訪問の日程調整との兼ね合いから、附属学校園訪問を挟むように表1の日程で実施した。特に「レポートの書き方」については、他科目授業などにおいてもレポート課題が多く出されることが想定される連休前に実施することとした。本年度は、新型コロナウイルス感染症に感染した/農耕接触者となった学生への対応として一部オンライン配信を行うこと以外においては、4つの全学共通コンテンツとも 415講義室にて対面で実施することができた。

また、第12回（6/20）以降、前期後半の授業においては、「学校園を『探究』しよう」と銘打ち、受講生一人ひとりが、幼稚園・小学校・中学校に関する探究課題を設定し、文献調査・インターネット上の情報リサーチなどをふまえ、報告書にまとめ、プレゼン発表を行うという一連の学習活動を行った。この探究活動は、既習の共通コンテンツ①～④で得た知識・スキルを活用して取り組む学修機会として位置づけ、共通コンテンツを通して得た知識・スキルを「自分のものとして使える知識・スキル」に高めることを目指して実施した。（これらの探究活動については、2020年度、大学入門ゼミFDとしてオンライン授業公開を行った授業をベースに、さらに改善し実施したものである。）

教育学部においては、moodle・zoom 等とは異なる「授業支援システム」を、学生が授業において活用しながら受講することができるよう、昨年度より整備をすすめている。これは、GIGA スクール構想により全国の国立・公立・私立の小・中・高等学校に整備されているタブレット端末とともに、授業において活用するために整備されている「授業支援システム」と同様の環境である。教師を目指す上で、現在全国の学校に整備されている授業支援システムを1・2年次のうちに「自らが活用して学ぶ」経験を通して、3・4年次で「授業で活用して指導することができる教員」としてのスキルを高めることを、教員養成における指導に位置付けることが重要だと考える。本年度も継続して、この授業支援システムを、共通コンテンツ①～④で得た知識・スキルを活用して取り組む学習活動「学校園を『探究』しよう」において活用することとした。これにより、オンライン授業として対応・指導せざるを得ない場合においても、授業を担当する教員と学生との情報共有だけでなく、受講する学生相互の情報共有が容易になった。残念なことに今年度も、6月に入り、新型コロナウイルス感染症の感染拡大傾向が認められたため、安全に配慮し、「学校園を『探究』しよう」の最終プレゼン発表活動の授業回をオンラインで実施せざるを得ない状況が生じた。このような状況においても、教員アンケートからは、「zoom と授業支援システムを併用して、オンラインでプレゼン発表を行う練習をしておいたので、コロナの感染拡大でオンライン講義に移行しても特に問題なく進められた」との意見が寄せられた。今後も引き続き、大学授業における授業支援システムの有効な活用方法を模索していき

たいと考える。

以上のように、本年度も共通コンテンツを含め、「大学入門ゼミ」の一部の授業をオンライン配信により実施せざるを得なかった。本年度の授業計画は、表 1 のとおりである。

表1 教育学部学校教育教員養成課程「大学入門ゼミ」 授業計画（実施分）

回	実施月日（曜日）	授業内容の概要
1	4月11日（月）	(全体)オリエンテーション（授業説明、moodle・Zoom 使い方概説など） 領域振り分け 当初希望調査　415 (組別) Zoom アクセス確認・入学後約 1 週間の大学生活について
2	4月18日（月）	小豆島一日研修 事前指導　415 講義室
3・4・5	4月23日（土） 4月24日（日）	小豆島一日研修（日帰り） 4/23(土) 1・2・5組　4/24(日) 3・4・6組
6	4月25日（月）	[共通コンテンツ①] 日本語技法 1～6組(全員)　415講義室
7	5月09日（月）	附属学校園訪問 事前指導　「学校園を『探究』しよう」全体説明
8-1	5月16日（月）	附属学校園訪問〈1〉 A・C ペア学級が訪問 （B ペア学級は休講扱い）
9	5月23日（月）	[共通コンテンツ②] プレゼンテーションの方法 1～6組(全員)415 講義室
8-2	5月30日（月）	附属学校園訪問〈2〉 B ペア学級が訪問 （A・C ペア学級は休講扱い）
10	6月06日（月）	[共通コンテンツ③] 情報整理の方法 1～6組(全員) 415 講義室
11	6月13日（月）	[共通コンテンツ④] プレゼンテーションの方法 1～6組(全員) 415 講義室
12	6月20日（月）	このうち2回、ペア学級で連携し授業を実施　HR 講義室 or ペア講義室
|	6月27日（月）	(1)「学校園を探究しよう」調査・探究活動（個人 or グループ）
14	7月04日（月）	(2)「学校園を探究しよう」プレゼン作成・発表練習（相互検討改善）
(3回)	7月11日（月）	うち1回、附属中学校訪問（訪問希望者のみ）
休講	7月18日（月祝）	
15	7月25日（月）	「学校園を探究しよう」組交流・発表会　授業評価他　HR 講義室

（2）学生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見・今後の課題

平成 26 年度の学生アンケートに、レポートの書き方をもっと早く実施してもらいたいとの希望が多かったことから、平成 27 年度以降1か月ほど前倒しし、大学入門ゼミ前半において授業を実施している（特にクォーター制の導入もふまえ、最近は連休前に取り扱うようにしている）。共通コンテンツ「レポートの書き方」に関して、学生アンケートには「高校まではレポートが大きく評価の対象になることは無く、書く機会もあまり無かったため、レポートの書き方を細部まで学べて勉強になった」「レポートの書き方は今までにやってこなかったことで、大学生には必要な知識がたくさん詰め込まれていたと思うため学べて良かった」「レポートの書き方に関するスキル教育がとても参考になりました。著作権の記載方法や、参考文献の選び方などが特にためになりました」「これから毎回必要になるため、情報収集等、習ったルールを遵守して取り組んでいきたいと思う」など、学生の必要感に応じ

たタイミングと内容による授業を提供できたものととらえられる。また、「レポートの書き方についてはコツや注意点を書いた資料を配布して頂いたので、とても書きやすかった。」「レポートの書き方の講義がためになりました。大学入門ゼミで配布された資料を用いながら他の講義のレポートを作成しました。」との回答に見られるように、共通コンテンツにおける配布資料を、ポイントを押さえた簡潔なものとなるよう工夫することによって、その後の他科目の授業で課された課題においても、学生が共通コンテンツの内容を参照しながら課題に取り組もうとする「大学での学びにおける基礎資料（手引き）」となることを示している。配布資料への配慮・工夫についても、引き続き検討したい。

加えて、「日本語技法では、教員にメールを送るときに適切な言葉遣いや要約の方法を学び、大学生活で役立つ場面が多かった。」「プレゼンテーションの方法についての講義を受けて、いろいろの授業での発表に活かせたのでよかったです。」など、高校生までとは異なる“大学生としての学び方”のスキルアップの基礎を、4回の共通コンテンツの授業を通して培うことができたとともに、自分でできる達成感を感じ、将来に繋がるスキルとしての価値づけを促すことができたと思われる。

共通コンテンツを授業内で取り扱うだけでなく、それらの授業を通して得た知識・スキルを活用する機会をいかに設定するか、また遠隔授業においても、対面授業に近い授業参加感・達成感を受講する学生に味わわせることを意識した授業方法の工夫についても、引き続き検討したい。

併せて担当教員からは、「ICT の基本的な操作については、共通コンテンツにする必要はないでしょうか。」「オンライン授業の場合に双方向でやり取りする方法や、ブレイクアウトルームに入って話し合いをさせるときに有効な手法なども（大学入門ゼミハンドブックに）載せていただけたらありがたいです。」などの意見が寄せられている。学部を超えて共通実施する「大学入門ゼミ」の中で、受講する初年次学生にどのような ICT 活用スキルを付けさせるのか、また喫緊の「オンライン授業配信」に、学部を超えてどのような授業で対応すればよいか、「大学入門ゼミ」を指導担当する教員に、次の時代への新たな指導対応が求められていることを感じている。

今後とも引き続き、大学生として必要な内容の精選、本学学生の事例を挙げるなど授業法の工夫、ならびに、全学共通コンテンツ相互の連続性を持たせるなどの授業実施上の工夫を行いつつ、一方では学生の直近の必要性だけでなく、学生自身が「学ぶことの意味」を感じ考えられる授業として、「大学入門ゼミ」を実施していきたいと考える。

2022 年度大学入門ゼミ実施報告書【法学部・青木 丈】

1. 実施の概要

本年度は、8 クラス開講し、一学年約 160 名であるため、1 クラス 20 名程度の規模で実施した。教員は分野の偏りがないよう配慮しながら毎年ランダムに割り当てられ、キャンパスアドバイザー（CA）制度と連動させることで、学生が 3 年次からの専門演習に入るまでの間、入門ゼミ担当者が面談等のケアをすることになる。

本年度開講されたテーマと担当者は、以下のとおりである。

・大学生活と（刑）法（天田 悠）
・アカデミックスキルズの実践（春日川 路子）
・自由と法について考える（岸野 薫）
・法の運用現場を学ぶ（平野 美紀）
・民主主義とは何だろうか（藤井 篤）
・転換期における雇用社会の実態と将来の展望（細谷 越史）
・時事問題について考える（前原 信夫）
・グローバルな諸問題を考える（鶴園 裕基）

入門ゼミの内容は、各担当教員が上記のテーマに沿って個別に指導をする部分と、共通コンテンツとして「情報整理の方法」「日本語技法①・②」「レポートの書き方」「プレゼンテーションの方法」を実施する部分に大別される。共通コンテンツの内容は、各担当教員のシラバスにも明記し、概ね第 1Q 期間の演習でひととおり取り扱っている。

さらに、法学部特有の内容としては、法学部資料室と大学図書館の利用方法の解説の回を、各クラス必ず入れている。これは、法学・政治学の学習にあたって重要な位置を占める文献資料の検索・収集方法を初年次に身に付けさせる意図がある。また、大学入門ゼミの全受講生を対象に、犯罪被害者が抱える問題をテーマにした心理カウンセラーによる講演会を開催し、規範意識と倫理観の涵養を促すとともに、レポート提出を義務づけて添削指導の機会を設けている。

2. 学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

アンケートによる学生からの評価は、共通コンテンツの内容自体は、大学での学習にとって基礎的なスキルを修得する機会であり、概ね好意的な評価が多かったように思われる。担当教員によって教授方法や比重の置き方は様々であり、共通コンテンツの中身や担当教員のクラスによっては、レポート作成の教授方法、プレゼンテーションや討論の機会など、もう少し改善をして欲しいという意見も見られたが、全体的には高評価であった。

実際には、受講学生のレベルが様々であるため、共通コンテンツに対する理解度や必要性も多様であり、アンケート結果における評価にもばらつきがある。しかし、共通コンテンツ自体は、香川大学生としてのアカデミックスキルを習得させる貴重な機会として、共通の枠組みを維持して初年次学生に対して提供することの意義は認められよう。

また、このアンケート結果を担当教員および次年度に担当予定の教員の間で共有し、画一的な教授方法ではなく、少人数教育の特長を活かしてきめ細かな指導のあり方を検討し、実施していくことが必要と思われる。

3.　教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

学部において大学入門ゼミの導入当初は、一部で、共通コンテンツを実施せず、共通コンテンツの内容を反映させた教員独自のコンテンツによって少人数教育を実施したクラスがあったものの、それから数年が経過し、全クラスで共通コンテンツの内容をシラバスに明記し、演習の中で実践することが定着した。これは共通コンテンツの意義や有用性が、教員間にも一定程度理解されるようになった証左であるといえよう。

他方で、教員アンケート結果を仔細に検討すると、共通コンテンツの中でも担当教員によって評価が分かれる点があるのも事実である。多くの教員に共通する点としては、『大学入門ゼミハンドブック』を基にただ口頭で方法を教えるだけでなく、実践を通して反復させながら身に付けさせるのが重要という点であり、共通コンテンツの内容を一通り教授した後も、各ゼミのテーマに合わせて担当教員が工夫を凝らしながら指導している実態がうかがえる。

学生アンケートと同様に教員アンケートについても、各担当教員にアンケート結果のフィードバックを行うとともに、次年度に担当予定となる教員に対しても、共通コンテンツの教授方法・内容についての心構えとして、アンケート結果の内容を共有することは有益であるため、担当者が決定次第、実施する予定である。

4.　改善すべき点等

教員アンケート結果から、法学部の特徴として、日本語技法を教えることの重要性を指摘する担当教員が多い。近年はスマートフォンの普及によって、相対的に PC の利用が減っていることもあり、学生の文章力が総じて低下しているように思われる。かような現状を踏まえて、PC 必携化や DRI 教育の要素も採り入れた、新たな『大学入門ゼミハンドブック』の制作を検討していただきたい。

以 上

大学入門ゼミ実施報告書 経済学部

1． 実施の概要

○令和４年度の開講数は 13 クラス（担当教員 13 名）で、1 クラスの受講生は約 20 名。

○共通コンテンツの教え方は各クラスの担当教員に任されているが、「レポートの提出（1回以上）」「PPT を使ったプレゼンテーション（1回以上）」を課し、成績評価に反映させることを共通内容としている。また、授業のうちの 1 回を「外出研修（フィールドワーク）」として栗林公園などへ出かけ、クラス内での親睦を深めることも可能としている。

○担当教員間のコミュニケーションは、前年度の意見交換会の開催（令和 4 年は 1 月）とメールでの情報共有が主。

○令和４年度は、意見交換会で出た改善点について対策が講じられた。

・クラス間での男女比の標準化 ⇒ 学年全体の男女比に合わせて各クラスの男女比を設定

・クラス間での成績のばらつきを是正 ⇒ 「優」を基本とすることを申し合わせ、学期末に入門ゼミ担当の教務委員からメールでリマインド

2． 学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

○実際に他の授業などの場面で学んだ内容を活用することができることから、「レポートの書き方」「メールの書き方」について、スキル教育を受けて良かったとする意見が多かった。

○「パワーポイントが情報Ａと被っている」「レポートの書き方やソフトの使い方など、他の授業で学んだことをもう一度入門ゼミで学ぶことがあった」という意見があり、特に「情報 A」の授業内容とのすみ分けについては確認する必要があるのではないか。少なくとも、入門ゼミ担当教員には「情報 A」の状況（シラバス、授業スケジュールや配布資料など）が共有されており、あらかじめ類似もしくは関連する内容が教えられていることが認識されている方がよいと思われる。（何も知らずに同じことを繰り返している場合と、「情報Ａでも同じ内容があったかと思いますが」と言い添えられた場合では、学生の受け止め方が大きく異なる）

3． 教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

○今年度の教員アンケートは回答が4名と少数にとどまった。

○「学生が最低限身に付けるべきアカデミックスキルが多岐にわたる一方で、入門ゼミの半期 15 回は短すぎるのではないか」「レポートの書き方で想定している論文形式のレポートは（卒論では必要だが）1 年生に求めるには酷ではないか」「メールやレポートの書き方など入門ゼミで学習したはずの内容があまり学生たちに定着していないように感じる」といった意見が見られた。今後の議論として、アカデミックスキルを卒論制作へ向けて段階的に習得するものとして整理し、「入門ゼミで担う部分」「学部授業やプロゼミ（2年）で担う部分」「学部ゼミ（3年演習）で担う部分」といった役割分担を提示することを考えてもいいのではないか。

4． 改善すべき点等

○「プレゼンテーションの方法の単元で「見せるスライド作成を心掛ける」ことを指導するにも関わらず、その手本となるべき授業スライドがあまり洗練されていないように感じた」との意見があった。

大学入門ゼミ実施報告書　令和４年度(医学部・髙橋弘雄)

１．実施の概要

学生に対する希望調査により医学科学生（109 名）を４ゼミ教員計５名で担当、看護学科と臨床心理学科の合同で両学科学生（85 名）を3ゼミ教員計８名で担当した（医学部受講全学生数 194 名、前期全 15 コマ）。

		担当者	クラス規模
M（1）	医療のなかの核酸	栗原亮介	27 人
M（2）	生体における塩と水の機能	北田研人・RAHMAN MD ASADUR	27 人
M（3）	医学研究における動物実験と動物倫理	伊藤日加瑠	28 人
M（4）	生物学におけるアカデミックリテラシー	髙橋弘雄	27 人
M（5）	日本語の技法と情報倫理	藤井豊・石上悦子・辻京子	27 人
M（6）	双方向学習のスキルアップ	渡邉久美・松本啓子・市原多香子	28 人
M（7）	医療における心理学	野口修司・岡崎聡	30 人

2．学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

学生アンケートでは、グループワークやプレゼンテーションに関して、楽しかった、勉強になった、などポジティブな意見が複数見られた。コロナによりオンデマンドの講義が多かった昨年度に比べて、今年度は対面で講義を行うことができたため、コロナ対策に留意しながらも、各教員が工夫してアクティブラーニングを含む講義を行った結果だと思われる。一方で、もっと学生同士のグループワークを増やして欲しいという意見も見られた。また、アカデミックリテラシーという基本的な技能を扱う講義のため、必要なスキルの習熟に役立った、という声がある一方、より高度な内容を求める声も聞かれた。基本技能を教えるパートについては、学生による個人差もあり、一部から難易度に不満が出るのは致し方ない部分もあると感じるが、グループワークを効果的に組み合わせるなど、更なる改善が必要であろう。

3．教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

教員アンケートでは、学生の積極的に学ぶ姿勢が見られて良かったという意見や、共通コンテンツの重要性を指摘する意見があった。講義を行うに際して、質問や声掛け、プレゼンテーションを一人ずつで行うなど、それぞれの教員が工夫して講義を行っていた。一方、内容的に学生の成績評価をつけるのが難しいという意見や、コロナ対策の観点から、より広い講義室を希望する声も見られた。

4．改善すべき点等

学生と教員双方のアンケートにおいて、グループワークやプレゼンテーションを行うことに関して、その意義を述べる意見が多く、今後の改善点としては、感染対策に気をつけながら、これらの部分をより充実させていくことがよいと思われる。尚、大学入門ゼミハンドブック関しては、授業を進める上でとても役立ったという意見が多く見られた。

大学入門ゼミ実施報告書　令和４年度（創造工学部・高尾英邦）

１．　実施の概要

本学部で大学入門ゼミを開講するにあたっては，本年度の大学入門ゼミを担当する全教員と日程や実施方法について事前に相談し，全体の合意を取りつつ実施している。その中でも可能な部分は合同開催とし，コース間，クラス間で相互に協力しながら実施している。

本学部は 7 コースに分かれており，そこでの開講数は 16 クラスである。授業担当者は 1 年生 CA の 16 名であり，クラスの規模は 20 名となっている。学期を通じた前半部分は創造工学部全体での合同開催とし，外部講師を招きつつ，大学生活を送るうえで重要な知識やスキルを得られる機会を設けるようにした。具体的には，本学図書館の利用講習，保健管理センター講師による「大学生のメンタルヘルス」に関する講習，ならびに香川県警の現職警察官による「生活安全・交通安全・防犯」の講習を順次おこなった。その後，各コースでの共通コンテンツ教育ならびにコース毎の独自カリキュラムを実施した。

本学部では，全学での共通コンテンツの教え方は各コースに一任されているため，「情報整理の方法」，「レポートの書き方」，「日本語技法」，「プレゼンテーションの方法」についての講義はコースごと，授業担当者ごとに教育上で様々な工夫がなされている。例えば，プレゼンテーションの方法の講義では，主には講義を聞くだけの受け身的な授業内容を超えて，Microsoft teams 上などで共通のコンテンツを共有しながらオンライン上で共同作業を行う能動的授業を実施したクラスもあった。これは PC 必携化ということで積極的に PC を活用した取り組み上の工夫である。本年度は昨年度に続いて，大学入門ゼミの講義のうち 1 回を基盤力テスト（全学共通学力テスト）の実施に当てた。

2．　学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

共通コンテンツとして実施した4つの内容については「4 種類のスキルは共通して大学生活に必要なものなので、今後の大学生活に活かすことが出来ると思った。特にレポートの書き方は参考になった。」との意見に代表されるように，学生にとって非常に有意義な内容であったといえる。特に「レポートの書き方」について評価する学生の声が多く「迷走していたレポートの書き方がわかり、効率的に学習を進めていくことに繋がった」などの意見が多数あった。

一方で，改善を望む点としては「レポートの書き方」や「プレゼンテーションの方法」の講義を実施するタイミングをより早めてほしい（できれば入学直後にしてほしい）との意見が比較的多かった。これは実際の修学において，講義で得たこれらのスキルが非常に役立つと考えている学生が多いことの裏返しでもあるといえる。

3．　教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

教員アンケートの結果では，やはり「コロナ禍」ゆえにグループワークを実施することが難しいとの意見がある。その一方で，十分な感染対策をし，オンライン上でのグループワークを実施する取り組みも行われており，現時点でも教育上の様々な試行錯誤が行われている段階である。そのほか，グループワークの事例集を知りたいという意見や，オンデマンドの講義で十分な内容もあるのではないかという意見もあった。コンテンツ全体については，学部特有のルールや理系学部特有の文化を工夫して授業に取り込む必要があるという意見が複数みられた。この辺りは各教員のクラスにおいて，授業上様々な工夫が行われている部分と考えられる。

4.　改善すべき点等

　大学入門ゼミの実施上，やむを得ないことであるが，毎年担当する教員が変わるため，講義を実施するうえで前年度に得られた知見やノウハウがうまく次年度に継承されにくいという課題がある。この辺りを同じコースの教員間でうまく引き継いで行ければ問題ないと思われるが，多分に属人的な要素を含んでおり，安定的な継承については保証されていない。過去に得られた講義実施のノウハウや知見等が安定して継承されれば，講義の質を高めることにつながる。そのためには，過去に得られた知見等を残し，バトンを渡すように継承する工夫について，何かしらの検討が行われてもよい様に感じる。

以上

大学入門ゼミ実施報告書（農学部）

1．　実施の概要

　農学部における大学入門ゼミは、演習に位置付けている為、各教員の主体性に沿って実施している。今年度の開講数は 10 クラス（教員数 10 人）、クラス規模は 16 名（1 クラス）、共通コンテンツの教え方については、教員の指導方針を尊重しって以下の 2 通りで実施した。

2 名教員体制で 1 クラス（30 人）を担当した

大学入門ゼミ A(3、4) 昨年は「化学嫌い」と「生物好き」が顕在化した為、今年は、化学の視点または生物の視点で「天然物リテラシー」を取り上げることで多様性の利点を教授した。共通コンテンツの教え方においても、常に、化学と生物の視座を見せながら化学嫌いにならないような配慮を行った。

大学入門ゼミ A(5、6)　地球温暖化予測でノーベル賞を受賞した真鍋叔郎博士の功績の理解増進を中心にして、今後の農業の在り方や温暖化抑止に繋がる取り組み、生物多様性の意味について一貫して教鞭をとった。共通コンテンツの教え方においても、常に、SDGs の考え方に関する資料を用意した。

大学入門ゼミ A(9、10) 農学部には、英語で講義を行うことに長けた教員が多く在籍している為、各教員の能力を最大限に活かす取り組みを実施した。キウイっこ等の大学知財等を題材に挙げた際、専門性の高い論文を引用するなど優れた発表を行う学生も多数いた。共通コンテンツの教え方では、教員の得手不得手を補いながら実施できた。

1 名教員体制で 1 クラス（16 人）を担当した

大学入門ゼミ A(1) 農学部らしい共通コンテンツと課題を行わせることが出来た。

大学入門ゼミ A(2) 準備の段階からコーディネーターとよく議論して実施計画を作成した。学生の高い集中力のおかげで与えられた回数内ですべての共通コンテンツと農学部らしいプレゼンテーションを行わせることが出来た。

大学入門ゼミ A(7) 少人数制の特徴を生かした実験や実習を行った。共通コンテンツでも独自の資料を用意し、農学部らしい演習となるよう実験データの取り扱いやプレゼンテーションを行った。共通コンテンツの教え方では、実験や実習を行うことを前提とした内容へ応用し運用できた。

大学入門ゼミ A(8) 注）教員の体調不良により開講しなかった。

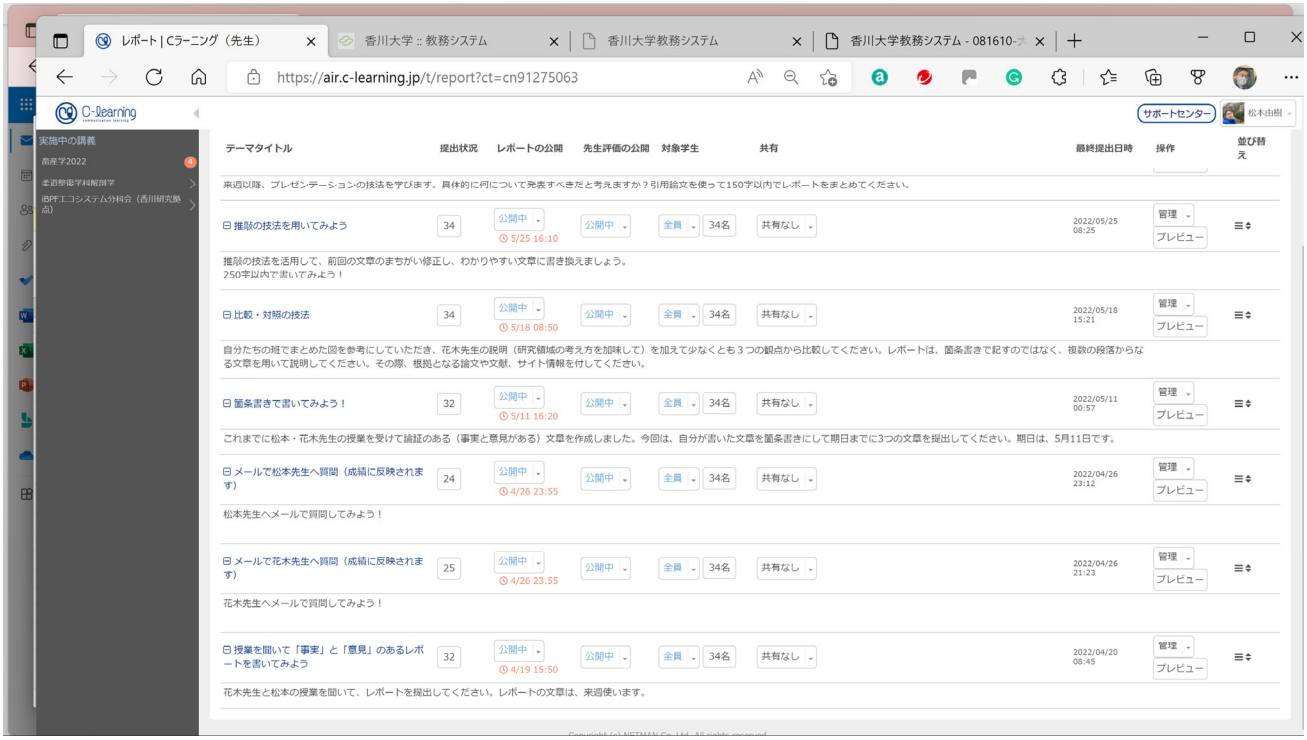
2．　学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

＊7月に実施する学生アンケートを踏まえて、所見をお書きください。アンケート結果は、修学支援課からお送りします。

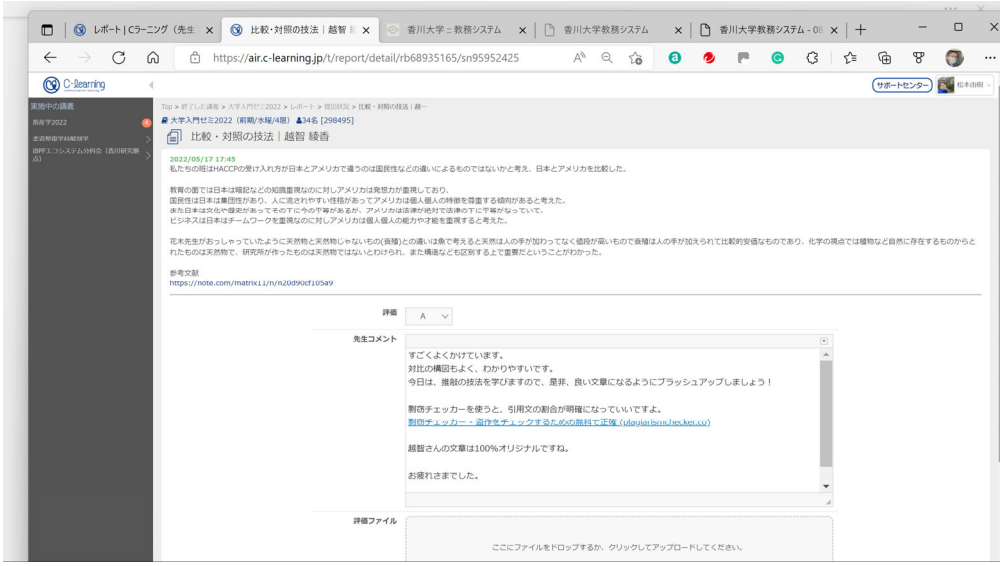
　農学部では、共通コンテンツの内容を教員の指導内容に沿って変更している。そのため、指導上不慣れな部分や正しく学生に伝わっていない点が露呈され、学生からはアンケート内に完全してほしい要望として挙げられていた。多様なコメントが出たことは、次年度以降、さらに農学部らしい演習へ改善できると考えており、各教員へアンケート内容への対応についてヒアリンを行い、次年度へ反映させることとなった。改善が不要なものとして、情報の整理

とプレゼンテーションの技法、レポートの書き方の指導については十分に対応できていたと思われる。改善が必要な点は、演習という位置づけを明確にするために、特に日本語技法については、グループワーク内で取り組ませるように情報を共有したいと思う。実例として、松本と花木の班では、c-learning を用いて日本語技法の運用能力の獲得状況を評価した。提出されたレポートは、各学生へ返答文を加え、誤った解釈をしている場合には修正例を交えてアドバイスを行った。

c-learning を用いたレポート提出例



学生レポートへのアドバイス例（個人情報が含まれていますので取り扱いには注意してください）



3.　教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

＊教員アンケート結果（または反省会での意見交換）について所見をお書きください。

大学入門ゼミコーディネーターとして各教員と個別に 10 分程度の意見交換（反省会）を行い、次年度以降に担

当される新任の担当者へ申し送って頂くようにお願いをしました。農学部では、前年度に担当した教員は、次年度に担当される教員のシラバス作成のチェックを行うよう依頼している。

意見交換の中で、今年度のトピックス「ノーベル賞受賞者の取り組みと農学研究」を題材に挙げた班は、学生からの評判が良かったと回答があった。また、「病気の植物を探してください」というテーマを掲げ実習を行ったクラスでは、農学部内の圃場を散策する活動を行った。学生の中には google 画像検索を使い簡便に作物の同定を試みたが、登録情報や作物画像の誤記が多かったことも学修できた。

昨年、1 年生では化学嫌いが顕著だった。今年は、これらを解消する取り組みを行った為、昨年よりは不確実性の要素が多い生物、確実性の要素が多い化学の双方の利点と欠点の理解増進に繋げたことで改善できたと考える。

4. 改善すべき点等

以上を踏まえて、「大学入門ゼミ」で改善すべき点があればお書きください。『大学入門ゼミハンドブック』についての意見でも結構です。

今年は、各教員の独自性の高い演習を実施できた為、昨年以上に農学部らしい大学入門ゼミを開講できた。学生アンケートを見る限り、オリジナリティーの高いクラス運営ができている為、学生目線から見た改善を求める声を聴けたが、学生自身が乗り越えなければならない課題のように思える。ただ、農学部らしさを強化する為には、農学部版レポートのまとめ方、農学部で共通したルーブリック行動評価の運用事例、Moodle や c-learning の運用例などを共有することが重要かとおもう。次年度に向けて、情報集約を行いたい。